

初期言語発達に関する調査(1)

— 幼児語から成人語へ —

小椋たみ子*・村瀬 俊樹**・山下由紀惠***

Tamiko OGURA, Toshiki MURASE and Yukie YAMASHITA
A Study of Early Language Development (1)
: From Baby-word to Adult-word

ABSTRACT

Some points of early language development were clarified through the survey for the vocabulary checklist (the category of animals's names, toys, vehicles, and food and drink) of the Japanese version of MacArthur Communicative Development Inventories for children from the age of 10 months to 36 months. Vocabulary size increased with the age. Girls' vocabularies were larger than boys', and significant differences occurred at the age of 24 months. The children begin to produce adult words at the age of 15 months. The transition points of baby word to adult word occurred around 21 months.

The generalization of a word occurred at the age of 12 months. The peak age of the generalization was at 21 months. After that, differentiation and specification of words were established.

These transitions in the early language development occur in relation to mothers' addressed language to children and children's cognitive growth.

問 題

子どもは一般的に9-11ヶ月頃に意味のあることば(初語)を言いはじめる(村田, 1968, 村井, 1970)。村田(1968)によれば, 子どもの言語学習がその社会の成人の間で用いられている語形(成人語)を用いることから始まることはない。はじめ子どもは“かたこと”を用いる。かたこととは, 成人語とは系統の全く違う“語”と成人語からの音韻転化によってできている語である。子どもが最初に発するのは前者で, “幼児語”といわれている。マンマ(食べ物), ワンワン(犬), ブー

ブー(車)のように, 幼児語は子どもにとり, 発音しやすく, 音を反復し, オノマトペ(人間の音声以外の音や声に対する模写的な音声)がそのなかでかなりの割合を占めている。

成人語化は1歳中ごろからはじめられる。Leopold, (1939, 村田, 1968による)は成人語化は子どもの手持ちの語(幼児語)に, ある時期に全面的に一挙に生じるものでなく, 各語の成人語化は比較的独立に, 試行錯誤的にすすめられる。Werner & Kaplan (1963)は幼児期の初期の擬音語や相貌語の本質は模写ではなく翻訳であり, 名の発生に重要な意味をもっている。幼児が「自分に固有」のことばや, 「幼児語」から慣用的言語へと歩をすすめるとき, シンボル体と指示対象の距離は著しく増加し, 両者間にもはや素材的類似性はなんら認められな

* 島根大学教育学部
** 島根大学法文学部
*** 島根県立島根女子短期大学

くなる。しかし両者の関係は維持されている。子どもが hammer の代わりに boom と言うとき、その聴覚的・筋肉的事象が音韻フォルムに擬音的にひきうつされている。しかし、その子が hammer という成人語に移行する時には、もはや指示対象の特徴にそのまま結び付いた音韻を自分勝手に用いることはできない。子どもがこのような事態に直面すると、新しい音声素材が力動的相貌的に再体制化されて、その指示対象に適合するようにシマ化活動を形どっていく。相貌化されたフォルムは擬音のパターンと比較すれば指示対象から一層隔たっているが、それでもなおこのフォルムは、素材的ではなく、指示対象を内的に把握する仕方によってその指示対象(意味体)のある側面を描きうつしている。

また、成人語化は育児者の与える強化手続が最も決定的に作用しているといわれている。成人語は対象や事象について現に子どもの形成している「概念」を表示するのに、実際上の効果が大きいことを、経験を通じて子どもが認識した結果である。おとなは乳児にたいして、成人語を使って話すことはなく、殆どの場合幼児語を使ってはなしかける。大人の側からは幼児語は「育児語」といわれる。村田(1960)は1歳児の生活と関係が深いと思われる378項目について、1歳児をもつ母親(西部方言地域と九州方言地域)100名との面接を行った。その結果、全被調査者の50%以上が育児語を使用している項目が42項目あった。たとえば「就寝する」の育児語は「ネンネ」「ネンネン」「オネンネ」で、「ネンネン」を92人が用いていた。他の研究(新谷, 1968:1969(村田, 1984による)の東北・北海道地域の調査)(加藤, 1970(村田, 1984による)の東京都の調査)でも、村田の42項目の育児語の再頻語と共通のものが多かったことが報告され全国共通の育児語が用いられていることが明らかにされた。村田はこの42項目の育児語を分析し、育児語の特徴として、擬音語・擬態語が多いこと、音声パターンの重畳が多いこと、一般的であることをあげている。このように、幼児語は母親の育児語の影響を多大にうけている。村瀬・小椋・山下(1992)は「動物の名前」10項目について1歳半から3歳までの子どもの母親の言い方を調べた。その結果、成人語が子の月齢とともに使用される比率が高まり、擬音語・擬態語・音単位の重畳の使用率が減少していた。育児者は幼児の用いる語とその用法にある程度合わせた語を用いながら、幼児のそれより一歩高い用法を子どもに対して示しているのである。

もうひとつ初期の語の獲得の特徴は、語の過度の般用である。子どもはマンマをあらゆる食べ物にもちいる。

またブーブを車、バス、バイク等乗り物を表すのに用いる。このように1語をその語の慣用の意味範囲を超えて、過度に拡張して使用することを「語の般用」とよぶ。岡本(1982)は最初はおもちゃのスビッツに対して用いられた「ニャンニャン」が9ヶ月から12ヶ月の間にかけてさまざまな対象に般用されていることを報告している。その般用の方向は四つ足獣一般の方向と、スビッツの毛の材質にもとづく色(白い)や感触(ふさふさしている、やわらかい)を基とした方向へひろげられていた。

本研究では米国で親の報告から言語能力を評価しようと開発された MacArthur Communicative Development Inventories (Fenson, Dale, Reznick, Thal, Bates, Hartrung, Pethick, & Reilly, 1991) 日本語版(小椋・山下・村瀬, 1991)の語彙チェックリストへの子どもの言い方についての親の記入から子どもの表出語彙の年齢変化にともなう成人語化の過程と語の般用について明らかにする。

方 法

調査対象：松江市内の8カ月-36カ月の保育園児670名の回収データのうちここでは、表1に示す10, 12, 15, 18, 21, 24, 27, 36ヶ月児、計179名を分析の対象とした。

語彙チェックリスト：19のカテゴリーの475語のうちここでは表2に示す「動物の名前」34語、「乗物」12語、「おもちゃ」8語、「食べ物と飲物」49語、計103語に対して、親が「お子さんの言い方」欄に記入したことばを分析した。

表1 サンプルの内訳

月 齢	男	女	不 明	全 体
10カ月	5	10	0	15
12カ月	16	11	2	29
15カ月	4	13	1	18
18カ月	8	16	1	25
21カ月	9	22	1	32
24カ月	11	10	0	21
27カ月	11	9	0	20
36カ月	11	8	0	19
計	75	99	5	179

表2 リスト語

動物			乗物	おもちゃ	食物と飲物			
動物	さる	きりん	飛行機	ボール	りんご	とり肉	牛乳	なす
くま	ねずみ	ひつじ	自転車	風船	バナナ	コーヒー	ミルク	きゅうり
はち	ふくろう	りす	バス	つみき	パン	クッキー	うどん	だいこん
とり	ペンギン	とら	車	本	たまご	クラッカー	みかん	やさい
むし	ぶた	かめ	消防車	しゃぼん玉	さかな	のみ物	まめ	ピーマン
うさぎ	しか	パンダ	バイク	人形	たべもの	ごはん	ピザ	ほうれんそう
ちょう	犬	スノーピー	乳母車	ペン	バター	お茶	ぶどう	ハンバーグ
ねこ	ロバ	おばけ	汽車	おもちゃ	ケーキ	おつゆ	スパゲッティ	カレー
にわとり	あひる	かに	トラック		あめ	みそしる	おそば	とうふ
牛	ぞう	怪獣	電車		にんじん	アイスクリーム	トースト	いちご
がちょう	さかな		タクシー		コーンフレーク	ジュース	みず	なし
ライオン	かえる		三輪車		チーズ	肉	トマト	チョコレート
								スープ

分析方法：(I)こどもの言い方の分類：親が記入した子どもの言い方を成人語系、幼児語系、成人語変形（構音上の問題）の3つの大きなカテゴリと下位分類（表3）に従い分類した。

(II)語の般用：異なるリスト語に対して同じ言い方をしている般用語の種類数、各般用語への般用の人数を算出した。

結 果

1. 語彙総数の平均

103語の語彙項目のうち親が子どもが「いう」の欄に○をつけた数を語彙総数として平均値をもとめると、表4、図1に示すように10、12ヶ月は1以下で15ヶ月(4.38) - 18ヶ月(16.32) - 21ヶ月(27.90) - 24ヶ月

表3 子どもの言い方分類

(チェックリストのこばをリスト語と記す)

系	下 位 分 類	例
成人語系	リスト語	いぬ→イヌ
	お+リスト語	にく→オニク
	リスト語+さん・ちゃん	くま→クマサン
	リスト語以外の成人語	べん→エンピツ
成人語変形	リスト語変形（代置，付加，省略等構音上の問題から変形したもの）	さかな→シャカナ
	リスト語の繰り返し	パン→パンパン
	リスト語変形+さん・しゃん・ちゃん	さる→シャルジャン
	リスト語以外変形	べん→エピツ
幼児語系	擬音語・擬態語	いぬ→ワンワン
	リスト語の一部の音の繰り返し	とり→トート
	擬音語・擬態語+さん・しゃん・ちゃん	うし→モーチャン
	リスト語以外の擬音語・擬態語	うどん→ゾーゾ

(51.47) - 27ヶ月(67.70) - 36ヶ月(94.15)と有意に増加している。24ヶ月で語彙チェックリストの語彙の50%、36ヶ月で90%の表出が可能になっている。表出語彙総数は図1に示すように18ヶ月児以降は女兒が高かったが男女で有意差がみられたのは24ヶ月のみだった（女兒平均63.50：男児40.55， $p < .001$ ）。

2. 成人語系、成人語系変形、幼児語系の表出語彙数の年齢推移

リスト語と同じ言い方の出現頻度を表4に示した。リスト語どおりの言い方が表出語彙総数に占める割合は10、12ヶ月が0、15ヶ月が15%、18ヶ月が38.7%、21ヶ月が40.7%、24ヶ月62.8%、27ヶ月が75.2%、3歳で93.6%で、年齢に伴い上昇している。下位カテゴリを成人語系、成人語変形、幼児語系にまとめ出現頻度をもとめ図2に示した。成人語系の語彙の初出は15ヶ月であった。成人語系の表出語彙数は21ヶ月(12.71) - 24ヶ月(36.95) - 27ヶ月(54.20) - 36ヶ月(90.68)と有意

表4 表出語彙総数とリスト語どおりの表出語彙数

月 齢	語 彙 総 数 平 均 値	S. D.	リスト語ど おり平均値	S. D.
10	0.20	0.41	0	0
12	0.79	1.11	0	0
15	4.38	4.60	0.66	1.53
18	16.32	15.36	6.32	12.50
21	27.90	13.95	11.37	12.34
24	51.47	23.89	32.33	24.24
27	67.70	27.49	50.95	30.71
36	94.15	7.21	88.15	10.16

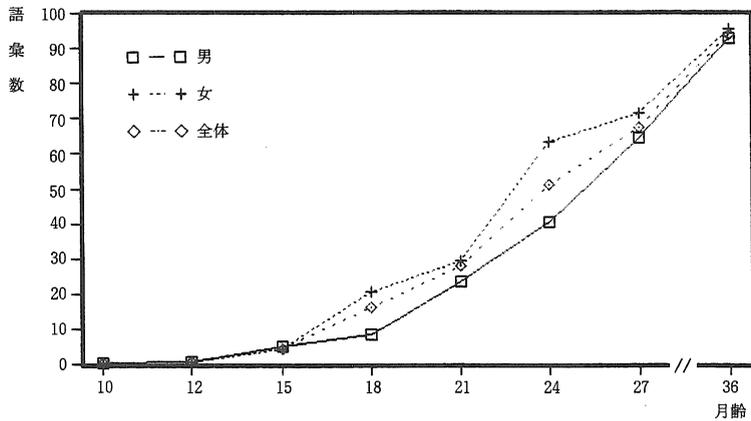


図1 表出語彙総数の年齢推移

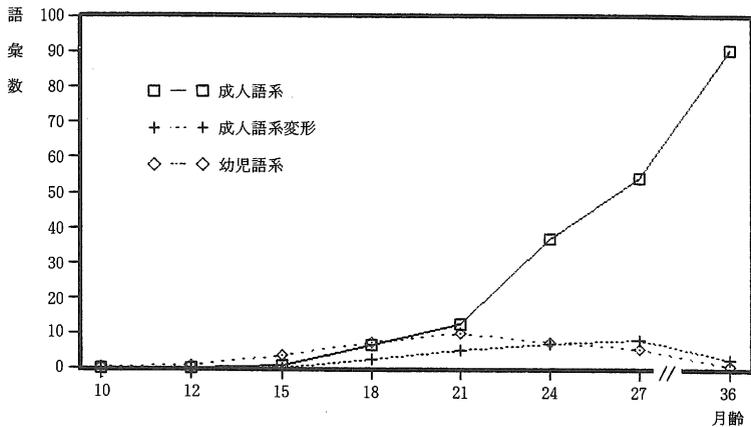


図2 成人語系, 成人語変形, 幼児語系表出語彙数の年齢推移

に増加している。幼児語系は10ヶ月ですでに出現しており(.20), 12ヶ月(.79) - 15ヶ月(3.61) - 18ヶ月(7.28) - 21ヶ月(9.90)と有意に増加し, 21ヶ月が最高で21ヶ月-24ヶ月(7.52), 27ヶ月(5.50) - 36ヶ月(.73)と有意に減少している。成人語変形は15ヶ月で初出し, 18ヶ月(2.48) - 21ヶ月(5.28)で有意に増加し, 24ヶ月で7.00, 27ヶ月(8.00) - 36ヶ月(2.73)で有意に減少している。成人語変形は「さる」を「シャル」と表出するように, 主に子どもの構音能力の未成熟から生じている。

3. 成人語系, 成人語変形, 幼児語系の各表出語彙の語彙総数にたいする割合

成人語系, 成人語変形, 幼児語系の表出語彙の語彙総数にたいする割合を図3に示した。成人語系と幼児語系

はほぼ21ヶ月頃交差し, 成人語系はその後増加し, 27ヶ月で73.4%, 36ヶ月で96.2%に達している。成人語変形語彙は18-27ヶ月では15%前後の比率を占めていた。

4. リスト語+さん(ちゃん)

「さん」「ちゃん」をリスト語, リスト語変形, 擬音語・擬態語につけた語彙数の月齢毎の平均値と出現人数の比率を表5に示した。平均値は低いが18ヶ月に初出し(.16), 21ヶ月(1.25) - 24ヶ月(3.40)と有意に増加し, 24ヶ月-27ヶ月(1.65)と有意に減少している。36ヶ月は1.00であった。「さん」「ちゃん」をつけたか, つけないかで見ると21-27ヶ月の半数の子どものみが主に動物を「さん」「ちゃん」づけで呼び, 24ヶ月の63.6%の子どものみが「さん」「ちゃん」をつけていた。

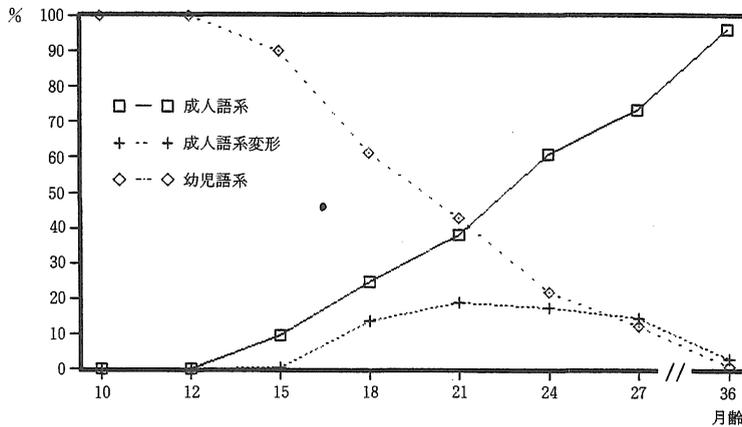


図3 成人語系，成人語変形，幼児語系語彙数の表出語彙総数に対する割合

表5 「さん」・「ちゃん」づけの出現人数の比率と平均値

月齢	有 (%)	平均値	S. D.
10	0	0	0
12	0	0	0
15	0	0	0
18	12.0	0.16	0.47
21	46.9	1.12	2.04
24	63.6	3.40	5.35
27	50.0	1.65	2.75
36	31.6	1.00	2.56

物をプープ（プーパー）と般用した子どもは15ヶ月に初出し、27ヶ月見まで22名がバス、トラック、車、三輪車、タクシー等をプーパーで表現した。お茶、水、おつゆ、みそしるや飲物をプッ（プウ）と表出するのは、15ヶ月見で初出し、これらは24ヶ月見まで13名が般用した。うどん、スパゲッティ、おそばの麺類をチュルチュルと表出したのは18ヶ月見に初出し、27ヶ月見まで16名が般用した。犬、うさぎ、牛等の動物をワンワンと表出した子どもは18ヶ月に初出し、21ヶ月見まで4名が般用した。般用語の種類、人数の最高は21ヶ月であった。般用語は27ヶ月までは幼児語系が80%近くを占めていた。

考察

5. 語の般用

表6に主要な般用語の種類と出現人数の年齢を示した。食べ物をマンマと表出した子どもは、12ヶ月に初出し、24ヶ月までの子ども32名がマンマを般用した。次に乗り

語彙総数は15ヶ月以降上昇している。21ヶ月から24ヶ月月への上昇（27.90→51.47）は大である。ほぼ50%の語彙が表出可能になるのが24ヶ月であった。19カテゴリーすべての総語彙数475語についての結果（小椋ら、

表6 語の般用の種類と出現人数

般用語	月齢	10	12	15	18	21	24	27	36	計
マンマ (食物)		0	6	8	6	10	2	0	0	32
プーパー、プッパー プープ (乗り物)		0	0	3	5	9	2	3	0	22
ツルツル、シユルシユル チューチュー、ツル (麺類)		0	0	0	3	6	6	1	0	16
プブ、プウ、プッ、プー (飲物)		0	0	3	2	7	1	0	0	13
ワンワン (四足獣)		0	0	0	3	1	0	0	0	4
計		0	6	14	19	33	11	4	0	87

1991) は21ヶ月から23ヶ月にかけて107.9→183.4, 24ヶ月から26ヶ月にかけて174.8→290.4と大きな増大があった。ほぼ本研究の結果も一致していた。村井(1970)は幼い子どもの語彙成長にかかわる要因として、(1)音声発達、(2)成人語化、(3)生活空間の増大、(4)質問の利用、(5)抽象機能の発達をあげている。

本研究で、語彙総数は女兒のほうが、18ヶ月以降高かった。McCarthy(1954)は国、方法、分析方法、言語指標の違いはあるが、多くの研究が女兒の優位を示しているとしている。しかし、Templin(1957)は性差は過度に強調されすぎており、育児スタイルの標準化、単一化の移行に伴い、性差は実際にはあまりいわれていないとしている。Cherry(1975)、Macaulay(1978)は性差は獲得のスタイルよりも速度にあるが、殆ど有意な差でないし、一貫してどちらかの性が有意ともいえないとしている。本研究でも24ヶ月のみで女兒が有意に高く、他の月齢は有意差はなかった。初期の言語発達において性差があるのか否かについては今後、観察の方法においても検討する必要がある。

本研究で、子どもの側での幼児語から成人語への移行は21ヶ月から24ヶ月頃に転換期があった。総語彙数に定める成人語の割合は21ヶ月が38.0%、24ヶ月が60.8%であった。村田(1964)の4児の1歳期の縦断観察では個人差があり、2名は1歳半で総語種数に対する成人語種数の比は40%だったが、のこり2名がこの水準に達するのは1歳の終わりであったとしている。いずれにしろ成人語化は1歳の中ごろから着実にすすめられていくとしている。Leopoldの子どもは少し遅く、1;10頃に成人語化が生じてきた(村田, 1968)。大道(1977)は1歳6ヶ月から2歳7ヶ月児36名について9ケの対象に対しての命名について保育園で保母への質問紙調査を行った。1歳11ヶ月以上で子どもは成人語の命名が多くなるとしている。方法の違いはあるが、本研究で成人語化が21ヶ月から24ヶ月にかけて生起していることは先行研究の結果とも一致していた。語彙成長、成人語化はほぼ21ヶ月から24ヶ月頃に生起し、時期が一致していた。Werner & Kaplan(1963)は語彙の増加という事実は幼児が成長の過程で自分の環境内の事象を分化し、特殊化してゆく傾向を裏書きしており、この結果、子どもの語音の指示対象は次第に大人の用いる名の指示対象に近づいてゆくとしている。21ヶ月ころは言語発達の他の面でも変化がみられた。小椋・山下・村瀬(1991)では語結合については、内容語+助詞の語連鎖の出現率が21ヶ月児で51.6%、二語発話は46.8%、ことばのつかいかたで過去のことを話す60%、ないもの、いない人について尋ね

る、話す等非現前事象への言及の発話の出現率が46.6%であった。このように21ヶ月以降に語彙の発達、語連鎖の発達、イメージを内化させる能力の必要な非現前事象の発話が生起し、象徴水準の高い言語面での発達がみられた。幼児語から成人語への移行はこのように、子どもの側の、概念化の認知機能の発達を基盤になされていくものである。Werner & Kaplan(1963)によれば幼児期の擬音的表現と相貌化された慣用語との相違は、幼児が語のカテゴリー的特性である文法上の位置、統語的機能等を認知しはじめるようになるで一層大きくなる。本研究の結果はWernerらの見解を裏づけている。

子どもの認知能力の発達の他に、親のことばかけが子どもの言語表出に大きな影響をあたえる。「育児語」(Baby Talk)という形で母親のことばかけの研究がなされてきた(村田, 1960, 1984)。村瀬ら(1992)は本研究の語彙チェックリストの母親側の言い方を分析した。「動物の名前」の項目で18ヶ月児以上の母親群で有効回答数が2/3以上あった熊・鳥・虫・兎・猫・牛・豚・犬・象・魚の10項目について18-36ヶ月児の母親の言い方を分析した。母親の言い方をリスト語どおり、擬音語・擬態語、音単位の重畳、接尾辞の付加のカテゴリーに分析した(リスト語以外は背反的カテゴリーでない)。母親の使用語は子どもの月齢とともにリスト通りの語が増加し、それ以外のカテゴリーの出現が減少した。母親側での育児語から成人語への移行(50%以上がリスト語通り初出月齢)は子どもの月齢22ヶ月から26ヶ月を転換期としていることを報告している。幼児語のなかに成人語+ちゃん・さんも含めており、また項目毎の分析で、分析方法が本研究と同じでないで子どもの言い方と母親の言い方を直接対応させることはできないが、母親も育児語を使用し子どもの発達に応じた言葉かけをおこなっている。親側が先行し子どもの幼児語から成人語への移行がなされるのか、子どもの言い方に対応して、親のことばかけが変化するのは、個々の項目への親のいいかたと子どものいいかたの一致・不一致をみていくことが必要である。また質問紙調査では限界があり、観察により明らかにしていく必要がある。大道(1977)は先の研究で保母自身は子どもに話すとき9ケの対象へ成人語で命名しているとの結果を得たが、実際の観察では保母は子どもにあわせて幼児語を使用していたと報告している。

次にことばの般用の問題に移ろう。本研究ではマンマが12ヶ月児で食べ物に般用されたのが最初であり、マンマが般用人数が最高であった。よく報告される四つ足の動物をワンワンと般用したのは18ヶ月児3名と21ヶ月児1名だけだった。Stem(1907, 村田, 1968による)は般

用を三つの次元に分類している。一つは全体としての事象の類似、次に部分的特性の共有、第三に着目される特性の移行である。本研究の般用は全体としての事象の類似からのものである。般用が一番多かった月齢は21ヶ月であった。一般に般用の幅は成人語化とともに縮められ、慣用の語を特定の対象がそれぞれもつという方向に漸次変化していく。本研究で幼児語から成人語への転換期が21ヶ月ころであり、般用も21ヶ月をピークに減少していった。21ヶ月ころは Piaget (1948) では感覚運動知能のVI段階であり、象徴機能が発達し、意味するものと意味されるものの関係が明確になっていく時期ともいえる。Werner & Kaplan (1963)では、「問題」でのべたように成人語化はシンボル体と指示対象の距離化である。成人語化の基盤には象徴機能の発達が必要である。幼児語から成人語への移行や語の般用の研究はわが国においても、外国においてもわずかにしかなされてこなかった。今後はこの移行過程と、この移行を引き起こす子どもの認識の発達や親のことばかけとの関係をあきらかにしていきたい。

文 献

- Cherry, L. 1975 Sex differences in child speech : McCarthy revisited. *Research Bulletin.Princeton*. NJ : Educational Testing Service.
- Fenson, L, Dale, P. S. Reznick, J. S. Thal, D. Bates, E., Hartung, J. P., Pethick, S. & Reiley, J. S., 1991 *Technical Manual for the MacArthur Communicative Development Inventories*. San Diego State University.
- Macaulay, R. S. 1978 The myth of female superiority in language. *Journal of Child Language*. 5 , 353-363.
- McCarthy, D. 1954 Language development in children. In L. Carmichael (ed.) *Manual of child psychology*. 2nd ed. New York. Wiley.
- 村井 潤一 1970 言語機能の形成と発達. 風間書房.
- 村田 孝次 1960 育児語の研究 ——幼児の言語習得の条件. 心理学研究, 31, 33-38.
- 村田 孝次 1964 言語行動の発達IV: 一歳児の使用語彙に関する縦断的研究. 心理学研究, 34, 275-284.
- 村田 孝次 1968 幼児の言語発達. 培風館.
- 村田 孝次 1981 言語発達研究—その歴史と現代の傾向. 培風館.
- 村田 孝次 1984 日本の言語発達研究. 培風館.
- 大道真知子 1977 命名行動の発達(1): 幼児語から成人語へ. 乳幼児保育研究 (京都大学乳幼児保育研究会), 5, 1-22.
- 大道真知子 1979 命名行動の発達(2): 幼児語から成人語へ. 乳幼児保育研究 (京都大学乳幼児保育研究会), 6, 17-40.
- 大道真知子 1981 命名行動の発達(3): 幼児語から成人語へ. 乳幼児保育研究 (京都大学乳幼児保育研究会), 8, 27-49.
- 村瀬 俊樹・小椋たみ子・山下由紀恵 (1992) 育児語の研究 (1) —動物名称に関する母親の使用語: 子の月齢による違い—. 島根大学法文学部紀要文学科編, 17 (I), 37-54.
- 小椋たみ子・山下由紀恵・村瀬 俊樹 1991 初期言語発達インベントリ—信頼性の検討. 島根大学教育学部紀要, 25, 17-31.
- 岡本 夏木 1982 子どもとことば. 岩波書店.
- Templin, M. C. 1957 *Certain language skills in children*. Minneapolis. University of Minnesota Press.
- Piaget, J. 1948 *La naissance de l'intelligence chez l'enfant (2nd edition) : Delachaux et Niestle*. 谷村 覚・浜田寿美男 (訳) 1978 知能の誕生. ミネルヴァ書房.
- Werner, H. & Kaplan, B. 1963 *Symbol Formation : An Organismic-developmental approach to language and the expression of thought*. Wiley. 鯨岡竣・浜田寿美男 1974 シンボルの形成: 言葉と表現への有機-発達論的アプローチ. ミネルヴァ書房.

付 記

本研究の一部は第3回日本発達心理学会第3回大会(兵庫教育大学)で報告された。

本研究の資料収集にあたりまして、大変お世話になりました松江市内の保育所と御記入いただいた保護者の方々に厚く御礼申し上げます。